

## ◆ 巻 頭 言 ◆

### 「シンガポールを訪問して」

日本ナレッジ・マネジメント学会 副理事長 久米克彦

花堂理事長の新体制が発足して半年が経ちました。日本ナレッジ・マネジメント学会にも色々新しい動きが出てきています。国内での動きもさることながら、海外との関係でもシンガポールやタイを中心に新たにアジアでの KM ネットワークを作ろうと動きがあり、豪州、香港に加え今般、インド、インドネシアにも輪を広げつつあります。日本を代表して当学会にも参加打診がありました。そのための準備・打ち合わせに山崎専務理事とシンガポールを訪問したものです。

シンガポールの KM 組織 (iKMS) では丁度 Knowledge Management Singapore 2014 というカンフェレンス及びワークショップを 3 日間にわたり開催しており、我々も招待され参加することが出来ました。内容的には濃く印象に残ったことが二つありました。

一つは、カンフェレンス初日の基調講演の内容でした。この講演は Ho Kwon Ping 氏 (シンガポール有数のレジャー、不動産開発会社の Banyan Tree Holdings 社の会長) によるもので、彼はシンガポール生まれでタイ育ちの華僑で、高等教育は米国とシンガポールで受けています。

彼の考え方は、組織の内外に分散して存在する各種の個別知識を把握し、関係づけ、それを目的に沿って統合し活用する一連のプロセスが KM であり、経営者やリーダーにとって最も重要な責務であると主張しています。知の創造のプロセスとしての知の統合は日々の日常活動の中で行われ、従って企業の文化に深く関与しているというわけです。企業文化がユニークではっきりしている中小企業であればあるほど成功する可能性が高いというというのが Ping 氏の考えでした。流石に多岐に渡る企業群を率いている経営者の知見だと思いました。

もう一つは、今回シンガポールでのカンフェレンスでは若い人達の参加が目についたことです。その理由を主催者である iKMS の Karuna 会長に聞いたら、シンガポールでは国の戦略で KM を必要な技術として位置づけ、例えば企業が幹部を雇う場合、資格要件として KM 学習を求めているためだそうです。国の組織でも民間でも KM をリーダーに不可欠な技術として位置づけているところにポイントがあります。知識共有だけでなく、色々な知識を統合することで組織の創造性を発揮する手法を意識的に学習させているというのは素晴らしいことです。シンガポール政府のグローバル人材育成方針が明確に現れています。シンガポールの若者達の眼が輝いていることを見て羨ましく感じました。

現代の競争社会の中で KM が生き残りの技術だとすれば、日本では KM をもっと重要な位置づけをし、自ら考え行動しなければならぬグローバル人材を育成していくことが必要です。また KM 学会としても、日本における KM の普及に努めるだけでなく、世界の KM 組織との共創を図るべく発信していくことが期待されています。そうした観点から今般のアジアのものも含め、世界とのネットワーク作りに積極的に関わっていくべきだと思う次第です。